

106 《聖マタイの召命》呼ばれたのは眼鏡の人

複数の証拠

2024

真鍋友範

1 証拠1 《ロザリオの聖母》カラヴァッジョ



《ロザリオの聖母》カラヴァッジョ

この作品で発見されるカラヴァッジョ独特の表現の証拠は、登場人物各位の身体動作にある。

【カラヴァッジョの描く聖母やドメニコ僧の親指】に注目しよう。

カラヴァッジョが、《ロザリオの聖母》の中で描いている、【立てられた親指】には、意味があるからだ。

【聖母の立てた親指】は、【直前に示した幼児イエス】を意味し、【聖ドメニコ僧の立てた親指】は、【直前に示した自分自身】を意味している。

【意味もなく、親指が立てられているのではない。】

これを知って、《聖マタイの召命》に目を移そう。



《聖マタイの召命》カラヴァッジョ

髭男の親指が見えていれば、【髭男の親指の意味が、わかる。】

その意味は、『お探しの人は、私ですか』だ。

髭男は、続けて、『それとも隣の眼鏡の男ですか』と、イエスに聞いている。

質問されたイエスは、【三段階の連続動作】で答えた。

左手のひらで、質問受容を意思表示し、続けて、右足を左側に一步踏み出して、自分の立ち位置を、眼鏡男の顔がよく見える位置に、移動させた。

イエスは、最後に右腕を廻して、『向こう側の人だ』と答えた。

イエスは、眼鏡男の顔付近で、廻した腕を止め、『私に従いなさい』と言って、召命を完了させた。

【カラヴァッジョの描いた物語は、簡潔明瞭だ。一切全てが不明瞭でない。】

ローマ・カトリック教会派美術史家は、17世紀美術史家ベッローリ由来の誤解説を、もうこれ以上世界に拡散してはならないだろう。

同様に、イエスの動作を一部しか見ていない、【聖マタイは、左隅の俯いた若者だ】と、誤った判断のドイツ学派美術史家も、その誤りに気付くべきだ。

2 証拠2 《聖マタイの召喚》テルブルッヘン

もう一つの証拠となるのが、カラヴァッジョと同時代に、ローマに画家修行に来ていたオランダ画家、テルブルッヘンだ。

彼にとって、カラヴァッジョのバロック表現は、衝撃であったに違いない。故郷のオランダに帰って、しばらくしてから、この作品と、同じテーマの作品の計2枚を、カラヴァッジョの描いた内容に準じて描いている。

もちろんその根底の構図意図は、【カラヴァッジョへのオマージュ】だ。



《聖マタイの召喚》テルブルッヘン

ストーリーはこうだ。

髭男は、入室したイエス一向に気づき、右手の人差し指と親指を合わせて、自身の胸に向け、『お探しの人は、私ですか』と質問している。

質問されたイエスは、どう答えたのかは、一瞬の観察では不明りと瞭だ。なぜならイエスの左手の人差し指がしっかり伸びた状態で描かれていないからだ。

そこで、イエスの動作を、しっかりと再観察する必要が生じる。

イエスの頭部は、真横位置だ。つまり、髭男ではなく、眼鏡男を見ている。

イエスの足元を見ると、両足間の軸線は、まっすぐに眼鏡男の足元に続いている。

つまり、【イエスは、『用があるのは、眼鏡男だ』と答えている。】

3 結論

カラヴァッジョの描いた《聖マタイの召命》において、イエスの召命対象者であったのは、疑う余地なく、【眼鏡の人】なのだ。